
ASIA WOMEN LEADERS INTERVIEW

難民を助ける会 AAR Japan 名誉会長 柳瀬 房子氏

Q1. ウクライナの現状と課題、最前線で支援を続けてくださっている中で現在の状況をお聞かせいただけますか？

AAR 難民を助ける会は人道支援を第一に活動の規範としています。今回の侵攻は国連憲章、国際人道法違反。何故このような戦争で多くの若者が亡くなるのか…という憤りを感じつつ、1日も早い停戦に向けて祈りながら動いているところです。

現在、ポーランドそして、ウクライナ西テルノピリ州の修道院、モルドバで避難している方々の支援をしています。通常は緊急支援の場合は国際協力の NGO として支援が重ならないように、例えば、医療関係、食料調達、難民のためのシェルター等それぞれの団体が自分の1番得意なところの分野に分かれて活動をしています。ポーランドでは日本の NPO、NGO それぞれがご縁のある所に支援に入っているのが現実です。

ポーランドは現在国連が入って捌いている状態ではないんですね。数日は大きな収容所でほっとできるような場所を準備するけれど、その後は逃れてきた人を1件1件の家が引き受けている状態なんです。1ヵ月以上家族を受け入れるのは大変なこと。お母さんと子供さん、お年寄りが多く、父親と離れ離れの生活もあり心苦しい思いです。そのような中で、私たちは活動を進めています。

実は、避難民になれた人は経済的にも比較的余裕のある方々です。また健康ではないと避難民になれません。一番大変なのは、ウクライナに残された人々でしょう。障害者、高齢者も、そしてそのお世話をなさっている方々も沢山います。停戦になったらいち早く、そちらの支援をしていかなければならないと思っています。

もうひとつはウクライナから日本へ3月2日から4月19日現在664名の方が避難されたと法務省が発表しました。日本に定住することについて今後、日本人とどのように共生していくかという事を課題としています。今までは技術のある方だけを引き受けてきました。もちろん日本は移民国家ではないので、あくまでも労働力として技術のある人を受け入れるという方向でしたが、ご縁のある人を受け入れていく事に対して、これから日本の社会がどうやって外国人と共生し、変化していけるか…そんな事を胸にスタートしている所です。

Q2. 寄付の使い道について具体的にお聞かせ下さい

今回ポーランドの修道院を通じて支援活動をしています。AARは政治、宗教、どこにも属さない偏らない市民団体です。

日本から職員が行くまでの間に必要なものを調達しておいてもらうために、先に支援金を送金しています。現地に着いてもAAR職員はウクライナまでは入れません。荷物確認をした後は教会の付属学校の親御さん達に車を出してもらうんですね。大きなトラックを連ねて行く訳ではないのです。何台も個人の車を出して、2日位かけてウクライナ国内に入って届ける。そして戻って来る。それを週1から2回位は行ける様ローテーションを組んでいます。緊急の食料、医薬品、おむつなどの生活用品など調達します。地域の人々の支援の輪も大きく広がっています。

モルドバの支援については、もともと保養所もあり、また学校の寄宿舎なども利用しているようで、そこに避難民の多くを受け入れている状況です。スペースはある、厨房もある、働いてくれるスタッフもいる、ただ冷蔵庫を開けても何にもない、だからそこに食べる物をと。材料さえあれば自分たちに任せて！そんな頼もしい人材がいるのです。そんな場所に今すぐに必要な物を届ける。そういう具体的な事を行っているという事をお伝えしたいです。さまざまな組織が寄付を募り、それぞれが懸命に活動をしています。私から皆様に申し上げるならば、その中でも、直接支援をされている方々や、今必要としている方々に、よりダイレクトにその寄付が届くところに応援してくださるとよりいいなと感じています。

ウクライナ緊急支援はこちらから

<https://lp.aarjapan.gr.jp/ukraine/>

Q3. 活動してきて困ったこと、今一番協力を必要としていることはどんな事ですか？

そうですね、山ほどあります。
資金のこと、人材のこと、プロジェクトのこと、その折その折に一つずつ解決していくしか方法はないわけで、焦らず誠実に対応するしかない、覚悟をして解決してきました。

一番苦しんだことは、当会のスタッフが、亡くなったことです。交通事故やマラリアといった感染症、そして、地震の余震に巻き込まれ、お亡くなりになった。この様な犠牲はあってはならないことで、常に気を緩めずに関係者に伝えて留意を促しています。

プロジェクトについては障がい者の自立支援を、ラオス、カンボジア、ミャンマーなどで何十年も継続していますが、現地の人々に移行できない現状があります。資金的に難しく人材は育っても AAR からの資金の応援がないと難しい状況です。日本なら障がい者の為の公的支援も充実してきているので継続できますが、当該地域においては健常者にさえ社会保障といったものが限られている中、まして障がい者における公的支援がなく、当会が退いたら、そのプロジェクトはストップしてしまうのです。

国として全体の資金力の充実が必要で、きちんと税収を計れるようにならないと難しいことと思います。特別な階級の方は日本人のお金持ちなど到底かなわないお金持ちですが、日本の格差社会などとは比較にならない程の格差の中、弱者の方々はますます取り残されてしまう現実です。何とかプロジェクトごと、移行できる手立てはないかとも考えています。

Q4. 私たちは影響を沢山与え続けてこられた方をリーダーと呼んでいるのですが、女性のリーダーとして大切にされてきた信念や価値観をお聞かせ下さい。

私はリーダーでも何でもありませんよ、ただ始めた以上運営していく責任がありますから。人道支援を第一に挙げて、その時その時で起こってきたものを1つずつ解決してきました。それがいつの間にか42年になっただけなんです。

様々な方がAARの門を叩いてくださったんですね。その人に何をプラスしてあげたら良い活動ができるかしら…とひとりひとりを観ていました。常に観ていたかもしれません。一人一人本当に素晴らしい若者が関わってくれました。

例えば現在の会長の長有紀枝（おさ ゆきえ）さん、彼女も大学院を卒業したばかりの頃、インドシナ難民のボランティアで、自分は数学が得意だから、数学を教えたいということで入ってきてくれました。その後に旧ユーゴ紛争でAARの活動に携わり、その研究テーマが「人間の安全保障」になったそうです。

同じ時に送り出した人の中に国際刑事裁判所で頑張っている人もいます。AARで活動しながらメディアで頑張っている人もいます。AARが1つの通過点になって、もしかしたら良い出会いの場を作ることができたのではないかなど。続けていると、10年位後に、今こんな事をしていますと報告しにきてくれたりするんです。自分は、その後会社経営して寄付できる位になりましたと報告してくれる。そんなことを言って下さって、原点がここにあったと思ってくださる方がたくさんいらっしゃる事が、何よりも嬉しい事だなと思っています。

当時のインドシナ難民の方も、ほぼみな日本国籍をとられているんですね。その方達が逆にAARに寄付をたくさんしてくれて、あの時自分達に奨学金を出してくれた事、勉強する機会を与えてくれた事、そのおかげで今の自分があるって。そんな風に言ってもらえると、私たちはあの時の皆さんの寄付をきちんと使えたのかなって、それが本当に有り難いなと思っています。振り返るとその交流する場所を提供する事が私の役割だったのかなど。長い事継続しているからそれでリーダーと呼んでくださっているかもしれないけれど、ただただ、一つ一つ、目の前の事を繋いできただけだったのかしらね。

Q5. 40年間も続けると言う事、毎回困難な事がこれだけ立ち塞がれて、それでもなお続けてこられたその原動力になったのは何だったか、お聞かせ下さい。

何か作れる物があればその製品を改善していけば良いのかもしれないですね。でも難民を助ける会は売るのが何もない。ひたすら皆さんにお願いばかりする日々でした。

難民を助ける会の設立者の相馬雪香さんから依頼された父が、我が家の1室を事務所に使ってください。担当する人がいないようでしたら、「娘に電話番くらいさせますよ！」と言う所からスタートしたんです。

私は当時まだ30歳。5歳と生まれたばかり娘の2人の子供がいて、家族がいましたのでそれなりに多忙でした。実家の近所にいましたので毎日実家に通うわけです。会発足半年後に父が亡くなり、事務局の責任者は私しかいなくなって、私がやめますと言ったらこの会は潰れる。既に1億以上の募金が集まり、毎日メディアの人も来るし、インドシナ関係の人も来るし、募金を送りたいんですけどどうしたらいいですか？と言う人もくるし、それを一つ一つ対応していくしかなかったんです。

子供たちの受験、親の介護、手一杯だったかもしれないです。でも、子供を預かってくれる人や協力者もいました。そんな感じからのスタートでしたが、今もこうやって運営できているのは、一緒に活動する人が、皆無給のボランティアで、90年代に入り有給スタッフを雇用するようになって、良い人間関係の中で仕事ができる事がすごく大きいかと思います。

政治に偏りたくない、でも政治家の方とのお付き合いもあります。どこの人達とも繋がってお付き合いをさせて頂いています。役員理事にはなっていないだけでも、こんな事で困ったって言う時、それなら自分が得意だよ！と言ってくれる人が必ずそこにいた。一人一人が広い人脈を持っている、そんな人達が集まってきたという事なのかもしれないです。内部分裂、それが全く無かったのが不思議です。それぞれが得意な分野を担当してただけだったのかもしれませんが。自分の限られた置かれた立場で精一杯やっただけなのでしょうね。若かったなど、寝ないで動いていたような時もありました。そんな感じですよ。

信用を積み重ねると言う事は本当に大変な事だなと思います。それは一人ひとりに誠実に対応していくと言う事だけなのかと思います。目の前にある事を大切にするという事なのかと。今回ウクライナの事でたまたまメディアにでたら、私の同級生から募金を送られてきたんですね。小学生の時にたまたま隣の席に座っていた男の子。小学校の1年1組の教室で隣に座っていた人が73歳のおじさんになってね。長いことよくやっってるねって。ああ私悪い事してなかったんだなーって思った瞬間でしたよ。

でも悪い事というか、失敗したとしても、みんな今日から変わることができますよね。今日から変わるって言うならば、また今日から一人一人と丁寧に付き合っていこうかなとか、いつもそんな風に反省しながら生きてますよ。



1948年東京生まれ。1979年に難民を助ける会 AAR に参加し設立半年後から事務局長。2000年11月から特定非営利活動法人の理事長を務めた。2009年7月に会長に就任。1996年外務大臣表彰。地雷禁止運動を支援する絵本「地雷ではなく花をください」（文：柳瀬房子絵：葉祥明）は日本絵本大賞・読者賞を受賞。62万部が既刊。現在、難民を助ける会（AARJapan）名誉会長。法務省難民審査参与員。

難民を助ける会 AAR JAPAN 柳瀬房子名誉会長

今あなたに伝えたいメッセージ

~YouTube/ ウクライナ国歌「ウクライナは滅びず」 AAR Japan 柳瀬名誉会長からのメッセージ + 東京ニューシティ管弦楽団~

<https://youtu.be/y20vQT9CoPg>

ウクライナ緊急支援はこちらから

<https://lp.aarjapan.gr.jp/ukraine/>



インタビュアー：アジア女性リーダーズフォーラム 代表理事 佐々木亜衣・エグゼクティブディレクター
橋本さやか/記事制作：野原沙織・氏家なを

ASIA WOMEN LEADERS FORUM

